

森岡督行さんに誘われ、逗子にある戸田吉三郎の自邸兼アトリエを訪問した。

丘の上に建つ、小さく四角い、可愛らしい家だった。

ご遺族に歓待され、まずリビングでじっくりと、88歳で亡くなったこの画家がどのように家族をつくり、暮らしをつくり、絵を描いてきたのかを伺った。

そのあとで、奥様の案内で2階のアトリエに入った。

白布がはずされ、函が開けられ、彼を愛した人々の手で、次々とキャンバスが並べられていく。そのほとんどが燃えるような裸婦の絵だった。

終始「形見分け」に立ち会っているような、穏やかな戸田家での時間のなかで、僕はかつて民俗学者のA先生から聞いた、ある情景を思い浮かべていた。

「アイヌの人々がどのように看取るか知っていますか？今際の時、兄弟や子どもたちは死出の旅へとむかう彼・彼女を囲んで座って、手でその身体をさすりながらウポポを輪唱するんです。そんな素晴らしい逝き方が、他にありますか。僕もそんなふうに死にたいと思っているんです」A先生は確かそのとき、母堂を亡くされたばかりだった。

吉三郎は生前、自身の作品について語らなかった。

晩年に出版した分厚い画集でさえ、手掛かりになるような言葉は、何一つ遺さなかった。

自作解説も回想もなく、図版のタイトルはすべて「作品」と番号だけを配した。

彼は戦後の日本を自由奔放に生き、たくさんの女たちを描いたが、その裸形の意味は謎のまま、妻と息子に託された。

主人を失った画室で、微睡み続ける女たち……その緋色の絵肌から去来する感情も、呼び覚まされる記憶も、対峙する人によって様々だろう。

だから僕も、何か絵画論のようなものを繰り出す無粋はせずに、森戸海岸に沈む夕日と一緒に眺めるように、絵の中のマジックアワーを皆で分かち合えたらと思う。

それは有限な人生と、芸術の永遠とを行きつ戻りつできる、絵描きだけに約束された豊穡な場所。戸田吉三郎とはその渚のような絵画空間を、存分に愛し、遊び尽くした人であったと僕は思う。

宮本武典  
(キュレーター／東京藝術大学准教授)